

# 伊地震 犠牲者ゼロの町

## 震源近くの「ノルチャ」

イタリア中部を襲った地震で、震源の近くにあ  
りながらほとんど被害を受けなかった町がある。  
26日に訪れると、過去の地震の教訓が命運を分け  
た実態が見えてきた。今回の地震で亡くなった人  
は、27日午前（日本時間同日夜）までに290人  
に達した。



ノルチャ中心部の様子。震源から近いにもかかわらず、今回の地震による被害がほとんどなかった=26日、山尾有紀恵撮影

## 教訓受け耐震化 街並みも維持

トリュフが特産で有名なノルチャ。中世に建てられた大聖堂がある広場を中心に城壁に囲まれ、多くの観光客が訪れる。米地質調査所（USGS）によると、今回の地震は南東約10キロが震源だったが、中心部は大きな被害を受けなかった。ゴムと金属の板を石材の間に挟むなどの耐震対策が各戸でなされていたことが理由とみられている。

一方、町全体が崩壊し、230人の死者を出したアマトリーチェは震源から南東約15キロ。死者ゼロのノルチャとは、対照的だ。イタリア内陸部は、地中海でアフリカプレート（岩

板）とユーラシアプレートがぶつかり合う影響でひずみがたまり、山脈沿いには地下に多くの活断層が走る。人口5千人のノルチャも、1979年の地震で歴史的な建物を含む多くの家屋が被害を受けた。97年にはマグニチュード（M）6・4の地震が襲った。そのたびに町全体で耐震化の努力が続けられてきた。

一方、町全体が崩壊し、230人の死者を出したアマトリーチェは震源から南東約15キロ。死者ゼロのノルチャとは、対照的だ。イタリア内陸部は、地中海でアフリカプレート（岩

防災対策本部には26日、市民らが続々と相談に訪れていた。テウタ・トサイさん（51）は「自宅の壁にひびが入り、心配で。最初の2日はガレージで眠った」。希望者は全員が無料で耐震診断を受けられ、手当てが必要な場合は自治体から補助が出るという。役場のサ

ただ、地震のたびに街並み再建が強調される一方、耐震補強は後回しにされがち。レブプリカ紙は、政府は1960年代以降に1500億ユーロ（約17兆円）を地震後の建物建設に充てたが、防災対応に割かれたのは10億ユーロだけとする。

「すでに約2千人が相談してきた」と語った。ノルチャがあるウンブリア州は、中世の石造りの街並みと自然の調和が美しい観光地。耐震だけを考えると近代化の建築にすれば魅力は半減してしまう。

今回は、人口密集地で周辺の建物が倒壊して巻き添えになったケースも多かった。地質学者のアンドレア・モッティさん（53）は「大切なのは1戸ずつではなく、地区全体で耐震対策を行うことだ」と語った。

（山尾有紀恵ノルチャ、喜田尚二ローマ、野中良祐）

パピア大学のパオロ・バズツロ教授（耐震建築）は石造りの建物について「現代建築のレベルの耐震性は望めないが、外観を全く変えずに倒壊を防ぎ、人的被害を防ぐことは建設費の10〜20%の費用で可能だ」と指摘する。柱やはりの間に単純な構造のプレートを置くだけで安全性は高まる。